大学間協同学習による英文ｅメールライティング：実践報告

津　田　晶　子[1)]　　金　志　佳代子[2)]

E-mail Writing Activities Through Intercollege Cooperative Learning

Akiko Tsuda [1)]　　Kayoko Kinshi [2)]

（2017年11月22日受理）

１．はじめに

本研究の目的は、福岡県（九州地方）と兵庫県（近畿地方）という距離の離れた日本の地方大学で、食物栄養学と経営学という専攻の異なる学生間で英文によるメール交流をした授業実践の成果と問題点を明らかにすることである。現在の日本の大学生は、スマートフォン上でのテキストチャット（主にソーシャルネットワーキングサービスアプリのLINE）でのコミュニケーションを主とし、コンピュータ上で電子メールを読んだり、書いたりという経験が少なくなっていると言われるが、実情はどうであるか、２大学間の学生の英語のメールのやりとりを通じて、何を学んだかについての２点を明らかにしたい。また､遠隔地に住む同年代の日本人の大学生が、互いの地域における風習、食文化について英語で学ぶ機会に触れることで、協同学習が学習者の英語学習に対するモチベーションにいかに変化を与えるかについて示したい。

なお､協同（言語）学習とは以下のように定義される。

> 「ペア活動やグループ活動を通して、学習者同士の相互学習を促す学習形態。
>
> 協同学習は、学習者が責任を持つことを促し、教師がすべてをコントロールする教師主導の授業から、より学習者中心の授業（learner-centered instruction）へと移行するために有効である。この他、学習者の授業参加を増やす、クラス内の競争の意識を軽減する、などの効果があると考えられている。」（Richards & Rodgers（2001）（改訂版英語教育用語辞典，2009））

２．国内外における協同（共同）学習

2.1　日本の大学の連携による協同（共同）学習の先行事例

大学の連携による協同（共同）学習の先行事例としては、長崎、鹿児島、沖縄の三大学教育学部が連携して、離島の小中学生を対象にした、遠隔共同学習の事例がある。この研究では、USBカメラによるビデオ会議システムを活用して、児童、生徒が「食文化に関する遠隔共同学習」をするものである。三大学の連携に関しては、対面での６回の打ち合わせ、メーリングリストを導入しているが、この実践報告の事例では学習者の主体は小中学生であり、大学生ではない。

2.2　電子メールを利用した外国語の協同学習

Greenfield（2003）では、香港の15歳から16歳のESLクラスの生徒と、アメリカ合衆国の16歳から17歳までの英語（国語）クラスの生徒たちが、12週間に及ぶ電子メール交換を行っている。その結果、香港の生徒たちは協同学習をポジティブに捉え、とりわけ生徒たちが英語のライティング力、スピーキング力やコンピュータースキルに自信を持つようになったことが量的・質的データより示されている。

また、Bohinski & Leventhal（2015）において、スペインとアメリカ合衆国の二国間で、アメリカ合衆国在住のスペイン語学習者（英語母語話者）２名、スペイン在住の英語学習者（スペイン語母語話者）３名の計５名の被験者による６週間の電子メールの協同学習を行っている。言語学習の観点から、互いに第二言語を学ぶもの同士が電子メールを交換することによって、ネイティブ・スピーカーによるオーセンティックな言語使用に触れることができることを利点として挙げている。さらに、被験者は自国の文化と相手の文化との比較、分析を行うよ

別刷請求先：津田晶子，中村学園大学短期大学部食物栄養学科，〒814-0198　福岡市城南区別府5-7-1
E-mail：atsuda@nakamura-u.ac.jp
１）中村学園大学短期大学部食物栄養学科准教授　　２）兵庫県立大学経営学部准教授

うになり、互いの文化理解を深めるに至ったことを報告している。

3．アクティビティの概要

3.1 学習者（被験者）のプロフィール

本研究の被験者は、福岡県（10 名：全員女子学生）と兵庫県（17 名：男子学生 6 名、女子学生 11 名）の大学生 28 名である。福岡県の私立大学である中村学園大学短期大学部（以下、N短大）で食物栄養学科を専攻する 2 年生は、1 年前期と後期に情報処理の授業と、1 年前期で学科の全員必修 15 回の四技能を学ぶ総合英語「英語基礎」の一環で、英語での自己紹介や、英語で短い自分の意見を書くトレーニングを経験している。この調査は、担当教員のセミナーを履修している学生を対象に実施し、セミナーの授業の一環として学内のパソコン教室を利用した。なお、このセミナーの目標は、栄養士を目指す学生のための国際交流を実践し、国内外の食文化を英語で学ぶことである。なお、このセミナー履修学生の中には、イギリスの海外研修から帰国したばかりの者や卒業後に海外への留学を予定しているものもおり、総じて、英語によるコミュニケーションについての関心が強い。また、このセミナーでは授業内で Moodle を利用しており、この調査のために、全員に Gmail のアカウントを取得させた。

一方、兵庫県の県立大学で経営学を専攻する学生（以下、H大学）は、1 年生の基礎ゼミナールを履修する 17 名である。授業は通年、週 1 回実施され、担当教員 1 名の指導のもと、主にプレゼンテーションやレポートの書き方などのアカデミック・スキルを学ぶ教育と同時に、将来のことを考えるきっかけとしてキャリア教育も実施している。また、1 年生全員が週 3 回の英語の授業（Reading & Discussion, Listening & Speaking, Writing）、週 1 回の情報リテラシーの授業を履修している。本協同学習のアクティビティーは、基礎ゼミナールの授業の一部に取り入れるかたちで学内のパソコン教室を利用して行い、メール交換は、大学の学生個人のアドレスを使用した。

3.2 指導手順および観察結果

福岡県と兵庫県の 2 大学間における協同学習は、2017 年 5 月から 6 月中旬までの 6 週間で実施した。指導に先立ち、著者らは Skype とメールで打ち合わせをした。学生には、事前に英語による電子メールを利用した他大学との協同学習を行うことを伝え、以下の手順で指導を行った。

3.2.1 事前アンケート

まず、事前アンケートでは、学生が普段、友人と連絡をとるためにどのような手段を利用しているか、次に、自由記述形式で電子メールのルールについて知っていることや気をつけていること、最後に、英語で電子メールを利用した経験があるかについて、またその頻度について回答してもらった。アンケートの回答は以下のとおりである。

①友人との連絡は主に何を使っていますか。（主なものを一つ選ぶ）

A．LINE　B．携帯メール　C．学内メール　D．Gmail、E．その他のメールサービス

回答結果：N短大 11 名、H大学 17 名の 28 名全員が友人との連絡に LINE を使用していると答えた。

②電子メールのルールについて、知っていることや気をつけていることを自由に書いてください。（自由記述）

回答結果：件名を書く（N短大：6名、H大学：2名）、自分の名前を書く（N短大：2名）、相手の傷つくようなことは書かない、言葉に気をつける（N短大：2名、H大学：5名）、送信する前に確認する（H大学：3名）、誤字・脱字に気をつける（H大学：2名）、一斉メールで受信しても、全員に返信しない、（N短大：1名）、添付ファイルの方法（N短大：1名）、などが挙げられた。

③英語で電子メールを打ったことがありますか。

回答結果：N短大では 11 名全員が英語でメールを打ったり、送ったりしたことがなかった。H大学では、14 名は英語による英文メールの経験がないと回答し、3 名が英語で電子メールを打ったことがあると答えた。この英文メールの経験がある 3 名のうち 1 名は、月 1 回程度、英文によるメールを送信している、と回答した。

3.2.2 英文電子メール・マナーとタイピング練習

英語による電子メールのマナーを学ぶため、ビジネスや私用のメールの送受信時に気をつけたいヒントが掲載されている英語サイト「101 E-mail Etiquette Tips」（https://www.netmanners.com/e-mail-etiquette-tips/）を利用した。授業では、担当教員によるサイトの簡単な説明を行ったあと、学生が各自でサイトの情報を読み、サイト内のクイズに答える、という作業を行った。また、タイピングに不慣れな学習者がいるため、学内のパソコンにインストールされているタイピング練習ソフトを利用し、必要に応じて各自で練習するように指導した。

3.2.3 電子メールのトピックとメール交換

電子メールの交換は、福岡県の学生 10 名から兵庫県の学生 17 名に送信することから始めた。まず、双方の大学の学生数が同人数でないため、福岡県の学生のうち

７名が２人の相手にメールを送信することになった。電子メールのトピックは、あらかじめ双方の大学の担当教員が決めており、（１）自己紹介、（２）大学・学部について、（３）住んでいる地域の食文化の順で英文メールを作成し、それぞれの学生が３回ずつメール交換した。英文メールは、担当教員がサンプル例（表１）を示し、学生が自由に英語で表現できる箇所を設けるようにした。

表１　英文メールサンプル例　（自己紹介）

件名（Subject）欄：Hello from <Name>, XXXXX University

Dear　XXXXX,
My name is XXXXXXXX. I would like to write about myself.
(Approx. 30 words)
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX.

Hope to hear from you soon.
Cheers,

XXXXXX<First Name>

担当教員は、学生が送信する前に簡単な英文チェックを行った。また、学生が MS-Word ソフトで英文メールを作成し、ファイルを添付して、パソコンから送受信する様子を観察した。

3.2.4　授業観察

授業では、学生の自主性に任せて、教員は Observer（観察者）としての立場をとり、学生から質問がない限りは、こちらからは手を貸したり、添削をしたりしないようにこころがけた。

⑴　Ｎ短大での観察

１年生から英語コミュニケーションの授業で英文タイピングをさせているため、英文タイプに対する抵抗感はほとんどなく、英和辞書サイトなども使いこなしている。しかしながら、メールを日常的に使用していないため、Gmail のアカウントを取得する、MS-Word ファイルを添付して送る、といったことで手間取る学生が多かった。また、Ｎ短大の方には、複数の相手にメールをしなければならない者がおり、宛先を間違って送るという例があり、実際のメールでも起こしがちなトラブルを体験した。

３回という限定された回数の交流であったが、学生は居住地や専攻の違う学生からメールが届くことを楽しみに待つようになり、特に（３）住んでいる地域の食文化については、学生が食物栄養学科専攻ということもあり、具体的な料理名や店名を挙げながら、詳しく説明することができた。

⑵　Ｈ大学での観察

情報リテラシーのクラスで MS-Word 演習は行っているものの、現状のカリキュラムでは、英文タイプを使用する機会がないため、アルファベットで英文を打つのを非常に難しく感じるとともに、予想以上にタイピングに時間のかかる学生が多かった。１回目のメールは、Ｎ短大から送信されることになっていたが、メールアドレスの宛先と宛名の間違いや、メールが届いていないなど、スムーズにメール交換できていない学生が数名いた。これを体験した学生の多くが、ショックを受けた気持ちを表していた。しかし、２回目以降は、メール交換できるようになり、事前に学んだメールのマナーにも気をつけながら、同年代の相手とのメール交換を楽しんでいた。

3.2.5　事後アンケート

電子メール交換による協同学習終了後、双方の大学の学生に事後アンケートを実施した。アンケート項目は、自由記述形式で（１）電子メールを使用した学習で良かった点、（２）今後の電子メール演習に向けての改善点、反省した点（３）その他についての回答を求めた。その回答結果は以下のとおりである。（「（３）その他」については、回答は０件であった。）

⑴　良かった点
- 他大学の人と交流できたのが良かった（Ｎ短大：３名、Ｈ大学：４名）
- 福岡県と兵庫県が離れていて新しく知ることがあった（Ｎ短大：１名、Ｈ大学：１名）
- 英語での表現を学ぶことができた（Ｎ短大：２名、Ｈ大学：２名）
- 英文メールの形式やマナーを学ぶことができた（英文メールでの挨拶のしかた、BCC など）（Ｎ短大：６名、Ｈ大学：２名）
- 文章を英語でつくることの難しさを実感した（Ｈ大学：１名）

⑵　改善点・反省した点
- もっと文法（英語）を勉強しなければならないと思った（Ｎ短大：１名、Ｈ大学：４名）
- メールが来ていたのに、返信を送り忘れていたことがあったので気をつけなくてはと思　った（Ｎ短大：１名、Ｈ大学：１名）
- メールのやりとりが少ないので、もっとしたかった（Ｈ大学：２名）
- もっと色んな事を話せるように長文でやりとりできるようにしたい（Ｈ大学：１名）

4．考　　察

4.1　大学間協同学習の可能性

Kohonen（1998）は協同学習（Cooperative Learning）が成功する５つの要素を挙げている。

１）Positive interdependence
２）Individual accountability
３）Abundant verbal face-to-face interaction
４）Sufficient social skills
５）Team reflection

今回の調査では、ペア活動のみで修了したが、さらに２大学間の協同学習として発展させていくためには、以下のように改善していく必要があると考える。

１）ゴールを明確にし、お互いが助け合うことで一つの課題が修了するようなレッスンプランにする。たとえば、ペアで１つのライティング課題を作成するようにする、また、ペアの相手にメールで尋ねたことの返事をまとめる、など、お互いが協力し合わなければ課題ができないような仕組みづくりをする。

２）今回は成績評価にこのアクティビティを入れていない。この協同学習の活動について、どのように成績評価されるかを明らかにし、積極的な参加を促す。

３）メール活動と併用して、英語でのプレゼンテーションビデオを送る、Skype や FaceTime を利用して英語でのチャットをする、などの活動を導入することで face-to-face interaction を増やす。

４）履修登録時に協同学習である本活動の趣旨を説明し、具体的な活動で自分が何をいつまでにすべきか確認させ、いわゆる Free-rider がないようにする。

５）グループでメール活動の振りかえりをする機会を作る。または、メール・マナーに基づくチェックリストをあらかじめ準備し、学習者がメール文を作成し、送信する前にチェックリストの項目を確認できるようにしておく。

4.2　日本人学生同士が英語で交流する利点

本協同学習では、福岡と兵庫という遠隔地の大学に在学する学習者が英文によるメール交換を行った。学習者のなかには、英語圏の国での経験を有する者が数名いたものの、全員が日本人の英語学習者であり、外国人留学生は含まれていない。こうした第一言語をともにする英語学習者同士が、英語をコミュニケーションの道具にしながら、ライティングというアウトプットにつながる活動を行うことで、ある程度の効果が本協同学習より示されることになった。学習者は、第一言語が日本語で、日本で英語教育を受けている。したがって、英語の学習経験や学習歴、英語のライティングスキルのレベルが均質化しているため、安心感をもって英語で表現することができた。

この大学間協同学習の利点の一つとして、まず、事後アンケートより「他大学の人と交流できたのが良かった」とあるように、日本の大学に通う同世代の学習者同士が交流することで、互いに共通の話題を提供するために一生懸命に自分の意思を英語で伝えようとする姿勢が見られたことや、自分の専攻分野や地域の文化について英語で説明することを体験できたことが挙げられる。次に、「英語での表現を学ぶことができた」との回答から、メール文を作成するにあたり、自分の意思を伝えるための英語表現を調べるという、自ら学ぶ機会が設けられたことである。最後に、「もっと文法（英語）を勉強しなければならないと思った」という回答より、学習者に英語学習に対する具体的なインセンティブを与え、モチベーションの向上につながった点が挙げられる。

5．今後の課題

本教育研究は比較的小規模、短期間の実践であったが、社会人になって必要となる英文メールでのコミュニケーションについて、学生に学ぶ機会を提供することができた。また、教員が想像していた以上に、現在の学生は、日常のコミュニケーションをメールチャットに依存しており、日本語であってもメールを使うことは少ないことが分かった。

今後のプロジェクトの課題として、以下の２点が挙げられる。まず、文法力や英語による表現力不足を感じている学生がスムーズにメール作成に取り組めるよう、メールで使用できる英語の定型文やモデルとなるメール文を効果的に提示する工夫が必要である。次に、学生がやりとりをした英文メールの内容をデータ化し、日本人学生がおこしがちなライティングの誤りについて分析することで、ライティング指導に役立てたいと考える。今後、さまざまなジャンルの英文メールに触れる機会が増えることが予想されるなか、本プロジェクトで学習した英文メールの基礎知識をもとに、学生自らが各タスクに対応できる autonomous learner（自律した学習者）になることを期待する。

参考文献

１）白畑知彦他 .（2009）.『改訂版英語教育用語辞典』東京：大修館書店
２）藤木卓他 .（2007）.「三大学の連携による離島の複式学級を結ぶ遠隔共同学習の実践」日本教育工学学会誌. 31 (suppl.). 137-140. https://www.jstage.jst.go.jp/article/

jjet/31/Suppl./31_KJ00004964367/_pdf
3）Bohinski, C. A., & Leventhal, Y. (2015). “Why in the World Would I Want to Talk to Someone Else about My Culture?” *The EUROCALL Review*, vol. 23(1), 11-16.
4）Greenfield, R. (2003). “Collaborative E-Mail Exchange for Teaching Secondary ESL: A Case Study in Hong Kong.” *Language Learning & Technology,* vol. 7(1), 46-70.
5）Kohonen, V., (1992). “Experiential language learning.” In. D. Nunan, (ed.), *Collaborative Language Learning and Teaching*. Cambridge University Press.